

察することになり、非常に貴重な経験となりました。このことは、在外研究を終えて福岡大学で再び授業を担当した際、あらゆる場面で何度も実感しました。

新型コロナウイルス問題の発生と対応

新型コロナウイルスの問題の発生とその対応は、皮肉なことに、私の在外研究期間における最も印象的な出来事として刻まれました。ハワイではアメリカ本土よりも感染拡大の時期が遅く、2月頃からアメリカ本土での様子をニュースで伝え聞くようになると、ハワイ大学の学生や教員もこの話題を次第に口にするようになりましたが、2月の時点ではまだ、インフルエンザのように、気をつけて生活すれば乗り切れるだろうという雰囲気でした。3月に入ると、一部の教員が、大学内でオンライン授業の実施について議論しているという話を明かすようになりましたが、少なくとも3月9日の週末までは、普段と変わりなく全て通常通りの対面授業が実施されました。なお、この時点までは、現地報道によればホノルルの位置するオアフ島の感染者は数人程度でした。

翌週3月16日の週は1週間春休みであり、その直前に、春休み明けに大学の全科目が全てオンライン授業に移行するとの決定が学生に通知されました。これを受けて、3月22日に急遽帰国し、福岡大学に直ちに状況を報告し、以後、国内研修の身分として、日本国内からハワイ大学ロースクールの残りの課程をオンラインで受講しました。なお、ハワイは同月

25日より最初のロックダウン（都市封鎖）を実施しています。

ハワイ大学の教職員が実際どの段階で、どの程度の状況を予測し、準備をしていたかは分かりませんが、少なくとも学生の立場から見ると、通常の対面授業を行っていた状態から全科目をオンラインで実施するまで、10日あまりしか要しなかったことは、大きな驚きでした。それだけ、アメリカの大学の教職員と学生が、IT技術を利用した教育や学習に習熟しているのだと思います。

日本から受講するハワイ大学のオンライン授業では、時差の関係で出席できなくなる科目もありましたが、柔軟な代替措置をとってもらい、無事にプログラムを修了することができました。

おわりに

ハワイ現地での在外研究が予定より4ヶ月も短くなってしまったことは、非常に残念に思います。しかし、オンライン授業の先進国とも言えるアメリカの大学において、通常の対面授業からオンライン授業へと切り替わる瞬間を実際に目にしたこと、オンライン授業を体験し、試験を受け、単位を取得したこと、その他、この未曾有のパンデミックにアメリカの大学がどのように対応したかをつぶさに観察できたことは、何ものにも変え難い貴重な経験になったと思います。

このような貴重な経験とチャンスを与えてくださっ



ハワイ大学ロースクールの正面入口にて



滞在していた賃貸マンションから見る景色。ハワイはレインボーステイト（虹の州）とも呼ばれ、至る所から頻繁に虹が見える。虹の輪の下、山のすぐ手前の建物群が、ハワイ大学マノアキャンパス。

た福岡大学の皆さま、法学部の先生方、そしてハワイ大学の関係者の皆さまには、感謝の念に堪えません。

観光都市のハワイは現在、非常に苦しい状況にあると聞き、胸が痛むばかりですが、私たちがこのウイルスを克服した暁には、再びハワイ大学を訪れ、本学との教育と研究の架け橋となれるよう尽力したいと考えています。



研究目的

私は、日本の会計基準と IFRS を比較して、いずれの会計基準の「質」が高いのかを、「利益マネジメント（経営成績を意図的に（合法の範囲内で）操作する行動）」の観点から研究しており、グリフィス大学でお世話になったモネム教授も、同じく利益マネジメントの観点から会計基準を研究されています。在外研究を決めた当初は、日本とオーストラリア間で、IFRS の適用にどのような質的な相違が生じるのかという点を明らかにしたいと考えていました。国際的には、経済的および法的な制度や慣習等の相違が会計行動の質に影響を与えることがいわれていますので、IFRS という同じ会計基準を用いて、日本とオーストラリアの質的相違をその要因と共に明らかにできると期待していました。

covid-19 とロックダウン

オーストラリアでもコロナウィルスの影響で、3 月にはロックダウンが実施されました。日本でも起こったように、トイレトペーパーの大量購入や、食料品の品薄状態がしばらく続きました。当時のオーストラリアの感染者はそれほど多くはなく、一定の地域（特に、ビクトリア）に集中しておりました。しかし、ロックダウンの期間が長く、その取り締まりも厳しいため、買い物以外で外に出ることはできない状態でした。在外研究期間の後半は、とても不憫な生活を強いられることになりました。現地の報道で「ケバブを食べ歩いてた人が逮捕された」とありました。それほど厳しいものかと驚きましたが、その一方で、マスクをしている人を見かけることはありませんでした。

やっと5月くらいになって少しずつ規制が緩和されていきましたが、閉店している店も非常に多く、活気があるとはとてもいえない状況でした。6月に国際線が一部再開されたこともあり、その機会に帰国することとなりました。

在外研究の総括

在外研究中にこのような事態になってしまい、当初の計画などは行動の制約上、達成できずに終わってしまったためとても残念ではありましたが、在外研究という貴重な時間を無駄にすること

はできないので、ロックダウンの中で、どうにか研究できないかと模索して、国際的に受け入れられる研究成果を得ることができました。

このような機会を与えて頂いた福岡大学に感謝するとともに、在外研究をお許しくださり、多くの気遣いとお力添えをして頂いた先生方と事務職員の方々にこの場を借りて深くお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。



象とした物理療法を実施しています。よって FSR では、同学部内に設置されているスポーツクリニックにおいて物理療法の臨床活動にも従事しました。

言葉も堪能ではなく、イスラム教の生活習慣にも不慣れであった私にとっては、FSR のスポーツクリニックでの活動は、スタートアップに最適の環境でした。現地の医療従事者とのやりとりを始め、クリニックで活動するインターン学生、大学内外からの患者とのコミュニケーションは、単に身体症状や物理治療方針を共有するばかりではなく、現地のライフスタイルや伝統・文化を肌で感じる時間となりました。特にムスリム（イスラム教信仰者）の女性は、自宅以外で髪や肌を見せることはありません。ムスリムのアスリートは、スポーツ用のヒジャブ（髪を覆うスカーフ）を身につけてスポーツ活動を行っています。もちろん水中用も販売されています。ムスリムの女性患者に治療を行う場合には、より丁寧な説明と同意が必要であり、大汗をかきながら細心の注意を払いました。幸いにも多くの患者さんはとても医学的・生理学的基礎知識とその理解に優れていて、我々が提供する物理療法とその期待される効果に対してとても興味を持って受け入れていただきました。また、スポーツクリニックには多様な種目のアスリートが来院していました。セパタクロ、ムエタイ、クリケット、ネットボールなど、日本ではあまり見ることもないイギリス由来や東南アジア特有のスポーツも多く、治療中に彼らが行っているスポーツのルーツや競技特性、好発傷害、競技の面白さを聞くことなども、私にとっては収穫となりました。ちなみに、マレーシアの国民的スポーツは何といってもサッカーとバドミントンです。私が赴任していた2019年の男子世界チャンピオンは日本の桃田賢斗選手で、現地でも大変な人気ぶりでした。桃田選手が2020年1月にマレーシア・マスターズで優勝した後、不運にもクアラルンプール市内で自動車事故に遭遇された際には、首相夫人、副首相、保健大臣など続々と病院に訪問され、その様子が現地でも大きく報道されました。

さて、FSR には、スポーツ科学とレクリエーション科学の総合学部として幅広い専門的なプログラムが用意されています。理系に強い総合大学である利点を生かして、スポーツ医学やスポーツ工学、また

豊かな自然環境を背景としたアウトドアスポーツの研究が盛んに行われていました。また一方で、福大スポーツ科学部には手薄な分野である、スポーツ経済、スポーツイベントマネジメント、スポーツマーケティング、スポーツの人的資源管理、スポーツメディア、スポーツスポンサーシップ、スポーツツーリズム、スポーツジャーナリズムなどの専門教員と学生スタッフが精力的に活動されていたのも印象的で、経済発展著しいマレーシアの勢いを感じる側面でもありました。



2020マレーシア OP（左が筆者）

FSR 内で私の世話役であったアリ先生（M. Ali K.）は、ゴルフの教員であり、一方で Human Resource Training の専門家であったため、私は彼が担当するゴルフ実習に参加して学生サポートを行う機会をいただきました。その一連のゴルフ実習で特に印象に残っているのは、2020年3月5日に開幕した男子ゴルフ・アジアーツアー「バンダル・マレーシアオープン」への参加（運営ボランティア）でした。学生は、自らがゴルフ技術やマナーを学ぶだけではなく、競技としてのゴルフがどのように進められるのか、プロの国際大会がどのように運営されていくのか、そこに関わる人間はどのような役割を担っているのかを大会全日程を通じて総合的に体験学習します。



アリ先生と FSR の学生（マレーシア OP）

私は、予選ラウンドではオンコース・スコアラーサポート、最終ラウンドはスコアボード係として学生と共に働きました。アリ先生のご配慮もあり日本から参戦していた片山晋呉プロの組をフォローさせて頂いたことも良い思い出の一つです。私は、本学スポーツ科学部におけるゴルフ実習担当教員の一人なので、実習主眼や状況は多少異なりますが、今回の経験を少しでも生かせればと思います。

シャー・アラムでの生活

私は、クアラルンプール中心部と UiTM の間にあるサウジャナ地区にマンションを借りました。赴任した2019年8月後半から2ヶ月程度は、インドネシア・スマトラ島の野焼きによる煙害「ヘイズ」に大変悩まされました。この時に大量購入したマスクがこの半年後とても役に立つことになります……。そして10月を過ぎると雨季がやってきました。毎日、経験のない嵐のような雷雨が、慣れない車通勤にプレッシャーをかけてきます。自然環境に慣れて生活が安定してきたのは12月に入った頃だったでしょうか。マレーシア全土、水道水はもちろん飲めませんが、食品衛生をはじめとした生活全般の衛生状況は概ね良好でした。屋台などを除く一般的なレストランでは、保健当局よりその衛生状況が抜き打ち調査され、その衛生レベルが店内に表示されています。客はその表示を見て安心して食事ができるということです。スーパーや青空市場では、南国特有の豊富な野菜や果物、また多種のエビとイカ、とても新鮮な鶏肉がところ狭しと並んでいます。

基本的に、地元スーパーや市場で入手できる食品



スランゴール州 地元のスーパー

はハラル食品（許された食品の意味）のために、豚肉、ソーセージやハム類、アルコールが使用された加工品などを食べることはできませんでしたが、多民族国家ならではのバラエティに富んだ食材と調理法によって、滞在中は食に飽きることがありませんでした。また、FSR 内での会議（教授会）やミーティング時は、頻繁に伝統的なマレーシア料理（ナシレマ Nasi Lemak、ナシゴレン Nasi Goreng、ミゴレン Mee Goreng など）が振舞われ、教員、技官および事務スタッフが共に食事と会話を楽しみました。マレーシアでは一部の外国人移住者を除いてアルコールを飲むことはありませんので、いわゆる「飲み会」はありません。その分、伝統的にティータイムやランチによって同僚や友人と食卓を囲むことが重要視されており、マレーシア人にとって大切な習慣として根づいていました。

2020年1月25日、南部の大都市ジョホール・バルで、マレーシア国内初となる新型コロナウイルス感染症の患者4名が確認されました。中国からシンガポール経由でマレーシアへ入国された旅行者でした。そして2月後半から3月初旬にかけて実施されたスリ・ペタリンモスクでの1万人を超える大規模の宗教集会は、寝食を共にする共同生活であった事から新型感染症を蔓延させる大きな要因ともなりました。3月中旬、入院者数553名になった時点で、マレーシア全土に活動制限令が発出されました。いわゆるロックダウンです。ライフラインに関わる最低限の機関以外は全て閉鎖され、厳しい時期は散歩や体操すら屋外では許されない状況となりました。世界中の感染流行状況が悪化していく中で、残念ながらこ

れ以降、私が帰国するまで大学キャンパスで実験研究、講義、臨床活動が再開されることはありませんでした。私の実験を手伝ってくれていたトレーニングセンター主任、バイオメカニクス研究室の大学院生とは再会することなくお別れとなった事、直接お礼ができなかったことが残念でなりません。

最後に

2020年2月より世界的に大流行した新型コロナウイルス感染症により、在外研究後半の6カ月間は研究計画の変更・中断を余儀なくされました。しかしこの1年間を通じて、私は多くの方々に支えられて貴重な経験を積むことができました。ロックダウン中、毎日のように励ましのご連絡を送って頂いたFSRの先生方・スタッフの皆様に感謝申し上げます。また、派遣して頂いた福岡大学、スポーツ科学部、そして帰国後の入国者隔離期間中まで様々なサポートを頂いた総務課の皆様に心から感謝申し上げます。

